

1. 実施概要

(1) 日時：平成25年2月23日（土） 14:00～16:30

(2) 場所：道の駅くじ やませ土風館

(3) テーマ：「新たに整備した施設を有効活用した中心市街地活性化」

(4) 進行

14:00～14:05 開会

・開会の挨拶 久慈市長 山内 隆文

14:05～14:10 開催趣旨説明

・内閣府地域活性化推進室参事官 古川 陽

14:10～14:20 関連施策紹介

・国土交通省都市局まちづくり推進課長 清瀬 和彦

14:20～14:50 基調講演

・岩手大学准教授 三宅 諭

14:50～15:20 事例紹介

・久慈市長 山内 隆文

・八戸市副市長 田名部 政一

・大垣市経済部長 鈴木 守

15:20～15:30 (休憩)

15:30～16:30 パネルディスカッション

・コーディネーター：三宅 諭

・パネリスト：久慈市長、八戸市副市長、大垣市経済部長、
久慈広域観光協議会専務理事 貫牛 利一

16:30 閉会

2. 開催市長挨拶

- 中心市街地活性化に取り組む全国21市と内閣府、国土交通省、経済産業省、総務省が共同し、まちの顔である中心市街地活性化に向けて「日本の元気は地域から」を基本に、首長、学識経験者、まちづくり商業関係者が一堂に会し、各地域の取組み事例紹介や議論が行われ、文字通り全国をリレーし、久慈市は21カ所目であり、そのトリを務めるものだ。
- 中心市街地については、当久慈市も様々な対策を行ってきた。本日の会場となっている「やませ土風館」は中心市街地活性化の起爆剤となるべく平成20年にオープンし、道の駅の登録も受けた。市民はもとより多くの観光客や道路利用者の方々にご利用いただいている。当市の取組み事例は後ほど紹介するが、八戸市、大垣市の事例も皆様と共有できればと考えている。盛りだくさんの内容だが、最後までご聴講をいただきながら、市の今後の活性化の有り様についてお互い理解を深めていければと思う。



3. 開催趣旨説明

- 中心市街地は、まちの顔。そのまちの顔が元気がないのではないかとわれて久しい。特に久慈市においては震災の影響もあり大変ご苦労されていると聞き、心から敬意を表する次第だ。国においては体制づくりを何とかしようということで、平成10年にまちづくり三法を整えた。まだまだということで18年に見直しを行いブラッシュアップした。それを総括していく時期に来ている。
- 資料にあるように、各省で応援メニューをつくっている。そういう中で全国各地厳しい状況だが、地道な努力をいただき、成果も出てきている。知恵と工夫をみんなで分かち合う、これがまさにシンポジウムの趣旨だ。21カ所の英知を集め、関係者が力を合わせて知恵と工夫を結集する機会にしていきたいので、本日は有意義な意見交換をしていただければと思っている。久慈市がもっともっと発展することをご祈念して開催趣旨の説明とさせていただきます。



4. 関連施策紹介

- 国土交通省では基本的に社会資本、インフラ系の整備、ハード整備になるが、それだけでなくソフトも含めて支援をしている。まず都市機能の集積の促進ということで、まちなかに都市機能を集積していきましょうという施策。まちなか居住の推進は、同じくまちの中心に居住を促進していくもの。都市再生整備計画があるが、まちづくりに関するいろんな形の支援を交付金という形でしており、まちづくりの関係の計画を全体として支援をしますよというもので、公共団体の事情に応じた形でより使いやすかったものだ。身の丈再開発は、地域の状況に応じた形で再開発してくださいという形で支援している。また区画整理についても、中心市街地の特例がある。公共交通関係の支援もある。暮らし・にぎわい再生事業は、医療関係、社会福祉関係、教育文化関係のような建築物の整備を進めていただくために、新築や空きビルを活用したものなどの整備を支援するものだ。
- これまでのものは、国の認定を受けてはじめて使える制度だが、認定しなくても使える制度がある。これは補正予算に盛り込まれたもので国会で最終的にまだ通っていないが、都市再生整備計画事業、民間まちづくり活動促進事業がある。時間の関係で細かい説明は省略するが、もし関心があれば、またこれからの活動の中で使ってみたいということがあればお問い合わせいただき、ご説明させていただきたい。



5. 基調講演

《脱大都市型の中心市街地再生》

- 問題提起したいものがある。特に中心市街地を掲げるあまり、他のところが見えなくなってしまうのではないかということ。もうひとつは、中心市街地というのが、何なのか。中心市街地はいつも同じなんだろうか。また人口は減っていくわけで、その中で今までいわれてきた活性化は可能なのだろうかということだ。近代はいい時代ではあったが、全部が右肩あがり成長していく時代は崩壊している。人が減って行く中でどうやって人を呼び込めるだろうか。経済成長が止まっている中でどうやって成長が得られるか。何を相手にしているのか分からない、そういう事態から抜けなければならない。近代では行政がリーダーシップをとり、めざす方向、対象が見えていて、ゴールが見えていたからみんながそれに追随したが、そろそろ変わっていかなければならないのではないか。
- 日本の都市計画は、近代の中では非常にいい計画だったと思う。ある一定の質が保証されていた。ただそれは近代の都市計画、また大都市型で、大都市に適用しやすかった。地方都市には必ずしも当てはまらないことがあったのではないか。もうひとつは都市の計画であって、周辺は入っていない。農村部の計画が入っていない。そういう点考えた時に、大都市の中心市街地と地方都市の中心市街地は同じなのだろうか。岩手に来て11年目になるが、久慈市は非常に特徴的なところで、来るたびにおもしろい。なぜここでも同じようなことを考えなければならないのかと思う。
- 人口減少が続いていくが、人口を物差しにするのは正しいのかということも感じている。また都市と農村は一体という考え方も大事なのでは。都市は交流を中心にして成り立つ場になっている。するとおのずとどこかに食糧を求めないといけない。だからこそ農村がある。都市計画はそこまで考えられていない。都市計画法に書かれてはいるが、できていない。人を呼ぶのは周りからだが、その周りがなくなろうとしている時にどうするのか。久慈市の場合、人口は減っていくが、20代後半の25～29歳がすごく増えていて、このあたりが大事なのかと思う。かなりの人が戻ってきている。出身者がどれだけ戻ってきてくれるかが非常に重要ではないか。
- 中心市街地はまちの顔といわれたが、求心力のあるものを持たなければならない。それを新しい時代で考えるならば、環境であったり、質の高い空間であったりではないか。何が必要かを考えると、まず地域にあった物差し。それとまちの中の物語をどうやってつくれるか、そのプロセスをみんなで共有すること。そして中でなく外の人とどうやって交流を続けられるか。そんなところが重要ではないのかと思う。



6. 事例紹介

(1) 久慈市

- 中活の認定は全国で3番目で、他の都市に比べ、人口わずか4万人規模の都市が認定を受けたのは初めてのケースだった。基本計画では、「やませ土風館」の建設をメイン事業として活性化を進めてきた。物産館と土の館の建設は、民間のまちづくり会社が主体となったもの。1億8千万円の約4割が個人出資で、地域ぐるみの会社設立ということで内閣府から高い評価を受けた。オープンと同時に道の駅にも登録され市民、多くの観光客に利用されている。その他やませ土風館周辺での憩いの空間整備事業、空き店舗活用の福祉施設の運営、まちなかへの住み替え支援事業などを実施。整備した地域では、春まつり、環境緑化まつり、街なか音楽祭、短角種子牛共進会なども行われている。まちづくり会社が企画した街なかサマーキャンプや市の花であるツツジを活用したまちづくりも進めている。
- 認定後に行われた主なソフト事業では、毎月1回行われている「やませ土風館まつり」、市内の手芸愛好家が手づくり品を持ち寄って展示即売する「ハンドメイドフェスタ」。また土風館周辺には十二支を祀る社があり、市民も知らない方もいるので、物語性を持たせながらこれを発掘するというで地域のテーマにしようと考えている。まちなかで廃れていた盆踊りも土風館建設を機に十数年ぶりに復活した。高校生ボランティアによるお化け屋敷など、年代を超えていろいろな人々がこの場所を活用して交流の機会をつくり出している。
- 成功店モデル創出・波及事業では、参加した店舗すべてが売上・客数とも伸ばしている。この取組みを商店街のやる気のある店に広げていきたい。また「北三陸くじ冬の市」も年4回あり、冬場のイベントが中心市街地になかったので行政側からも仕掛けてやっている。中心市街地の人口は、中活認定を受け、やませ土風館がオープンした頃に一時的にはあるが増加した。ただ目標には届いていず、唯一達成していないのがこの定住人口だ。三陸鉄道も運行を再開。八戸線には秋、「東北エモーション」が運行開始する。被災した「もぐらんぴあ」は「まちなか水族館」として駅前に仮オープン、小袖海女センターも仮設で活動を再開している。NHK朝の連続テレビ小説「あまちゃん」も放送開始となる。市民ひとりひとりがコンシェルジュという気持ちでお迎えしなければならないと思っている。



(2) 八戸市（青森県）

- 八戸市は全国屈指の水産都市であり、また北東北随一の工業都市といわれている。中心市街地は本八戸駅の南側に約108ha広がっている。城下町として栄えてきた地域だ。夜の賑わいを演出する横丁、また三社大祭、えんぶりも中心市街地で行われている。歩行者通行量は大幅に減少、中心市街地では大型店舗が閉店し、空きビルになっている。居住人口も7年間で約500人、率にして10%減少している。こういう状況で、47の事業と、都市機能、

観光、商業、まちなか居住、交通環境という5つの基本方針をたて、平成20年に基本計画が認定を受けた。

- 主な事業としては、認定を受けながら同時に進めてきた八戸ポータルミュージアム「はっち」。地域の資源を大事に想いながら、まちの新しい魅力を創り出すことをコンセプトにしている。「はっちひろば」などの会所場づくり、「食のスタジオ」などの貸館事業、また「八戸のうわさプロジェクト」や「八戸レビュー」、「はっち流騎馬打毬」などの自主事業にと展開している。多くの入館者数もあり、まちの賑わいにつながっていると思う。また「はちのへほコテン」は、平成21年度から誰でも参加できようなものに変えて、5月から10月まで実施され、ほぼ定着していると感じている。



- まちなか居住に関しては、分譲マンション15階建て86戸がすぐ完売になった。(株)まちづくり八戸が整備した借上市営住宅も即入居となった。中心市街地へはマイカーではなく公共交通を利用していただきたいという観点で、バスの利用を増やす、使いやすさを目指すこともしてきた。バス料金を押さえる実験もしているところだ。こういう取組みを図った結果、22年を境に歩行者通行量などが若干、増加している。22年から24年では休日でも45%増加。居住人口も率としては追いついたといえるが、実質はまだだと考える。また、現在空きビルとなっている旧長崎屋を解体して複合ビルにする計画がある。旧マルマツ、Recでも複合ビルの構想が進んでいる。この動きを継続するため第二期計画の策定に取り組んでいきたい。

(3) 大垣市（岐阜県）

- 大垣市の中心市街地活性化基本計画は、平成21年に認定された。全体の方針を、歩いて楽しめるとともに、住みやすく便利な「大垣らしい」魅力を発揮し、まち全体でにぎわいを創出する、とした。基本方針は、まちなかのにぎわい創出と、まちなか居住の推進とし、それぞれ数値目標を掲げている。これらを達成するため「元気ハツラツ市」などのソフト事業のほか「奥の細道むすびの地周辺整備」、「大垣駅南街区再開発事業」などのハード事業を官民連携で積極的に推進している。



- ソフト事業の目玉が「元気ハツラツ市」で、平成22年から商店街の皆様により毎月第一日曜日に開催。全市的な参加交流を企図し、多くの来場者を集め定着している。その他のイベントでは、「芭蕉元禄大垣きもの園遊会」や「水

の都おおがき舟下り・たらい舟」、また空き店舗を利用した「アートフルタウン大垣」、そして「芭蕉元禄大垣イルミネーション」や中心市街地を走る「城下町おおがき新春マラソン」などがある。とくに体験型のニーズが高まってきていることから、大垣らしい観光事業として「舟下り・たらい舟」を実施しており、JR東海などと連携して駅でのPRや乗船券の販売、旅行商品の販売を行っている。

- ハード事業の目玉として位置付けたのが「奥の細道むすびの地記念館」で、昨年4月8日にオープンした。昨年8月には入館者10万人を超えた。2つめは、JR大垣駅周辺における整備事業で、大垣駅北自転車駐車場、南北自由通路、北口広場、またまちなか居住を図る南街区再開発がある。「まちなか歴史回廊整備事業」では、歴史文化・観光資源を活かした中心市街地の回遊性向上に取り組んでいる。これらの施策を構築しながら、歩いて楽しめる中心市街地を目指し、その結果、にぎわい創出とまちなか居住の促進による中心市街地活性化を実現したいと考えている。

7. パネルディスカッションの概要

- (コーディネーター) まず3人の方々から事例をご紹介いただいたので、その感想を伺いたい。
- (貫牛専務理事) この地域の強みは何なのか、弱みは何なのかということをも自分たちなりに整理させていただく中で、まずは強みを集結して地域外からおいでいただくことで、7万人では不足している分を大きくふくらませていこうというのが、観光というテーマを切り口としたまちづくりの一環であると考えている。各地域の駅を中心として、まちという魅力をさらに引き上げていく必要性から、中心市街地活性化については観光とリンクさせた取組みが必要とさらに確信した。
- (コーディネーター) 活性化をどう捉えるか、また観光をどう捉えていこうと思われているかなどを伺いたい。
- (久慈市長) 行政は人の流れをつくることはできても、個々のお店にひきこむことは決してできない。久慈市は様々なイベントがあるときは集客できるが、それが無い時も楽しい中心市街地になっているかという点、そこまで到達していない。NHKのドラマもあり、1回は来てくれるが、歩いて楽しくなければ2度3度は来ないだろう。先生のご講話にあったストーリーをつくるということが、非常に大切なことだ。商店街として統一の物語をつくっていく。ソフトの面でもっと力を入れていかなければならない。
- (八戸市副市長) 活性化とは、端的に人が歩いていること、人の声が聞こえることと考えている。人の流れは活気を生む。お金が落ちる。そこで「はっち」のようなみんなが集まって来られる事業を考えている。そういうところから商店街に人の流れができてくる、と思っている。工場を見る、また夜景を海の方から見るなども観光だと思う。観光資源は自然だけではなく、工夫によっていろいろあるのではないかと。
- (コーディネーター) 大垣市と久慈市の印象の違いなどを少しお聞かせいただければ。
- (大垣市経済部長) JRで来たが、非常に風光明媚なところで、海という大きな観光資源があると感じた。大垣市ははっきり言って観光市ではない。大垣市は芭蕉のむすびの地として、芭蕉との関連のある他の市とは違い、むすびとして全部をPRしようと記念館をつくった。いろいろと工夫をしなくてはやはり人は呼べない。

- （貫牛専務理事）継続してやっていかなければならないと思っているのは、まちなかコンシェルジュで、自分のまちの良さを認識し、あいさつから含めてまちを語れる人が増えていくのは必要だと思う。また健康志向で、歩くということを旅行としている国立公園三陸トレイルというのも意識していきたい。JR東日本では「旅市」というテーマがあり、歩くことで地域の人と出会い、地域の人とめぐるといった商品がある。
- （コーディネーター）中心市街地活性化に向けた個人の考え方、また夢のようなものを伺いたい。
- （久慈市長）非日常性という言葉は大切だと思う。それをいかにお伝えできるかが観光にとっても重要なことではないか。郊外型の大型店舗では、駐車場からけっこう歩く。でも中心商店街に来た途端に、歩かない状況が出てしまう。まちに一体感がない、移動する楽しみがないということか。商店街の方々としっかり議論を交わしながら取り組んでいきたい。
- （八戸市副市長）非日常は連続すると、日常だ。だから非日常は、毎日あつてはいけないのかもしれない。そういう意味からすると、たまにあるから人が集まってくる。そこに行くとか何か楽しみがある、そういった期待感を出せるような事業を進めていかなければと思っている。「はっち」は開館してまだ2年しか経過しておらず、どの取り組みも今は新しい。しかし、同じ事業をやっていると日常のものになってしまうので、非日常を作り出すにはこれからが正念場かなと思う。またネット通販などが増えるのに伴い、商店街における適切な販売のスタイルが変わっていくことが大いに考えられる。時代に合わせた、発想の転換が必要なのではないか。
- （大垣市経済部長）非日常は、仕事などのストレス解消にも大切なものだ。今駅前開発しているところは、どこへ行っても同じだ。大阪、名古屋、東京、どこも変わらない感じがするが、それで非日常といえるかという疑問がある。非日常をいかにつくり出すかというのが重要だと思う。
- （コーディネーター）人の流れをつくっても、店の中に入れることはできない、というのは非常に大きな話で、やはり行政ができる限界と、そこに住んでいる方などの協力が必要だろう。同時に、人の流れが活気を生むのでそれができるような取り組みが必要だ。工夫が必要で、非日常性というのは、そのひとつに過ぎないのではないかと。むしろ時代に合わせた考え方、スタイル、発想の転換が必要ではないかということ。いちばん大切なのは回遊できること。またクルマで来てもゆっくり回遊できるという、この矛盾をどのようにして超えていけるか。それだけの魅力と安心性、距離感をつくり出していくことが必要なのではないか。



8. 閉会